

地域の魅力を運ぶ地方鉄道の挑戦

鳥取県東部を走る第三セクター「若桜鉄道」。1930年に全線開通した旧国鉄若桜線を前身とし、鳥取市南部の八頭町と、兵庫県境に接する若桜町を結ぶ19・2^キのローカル線だ。

JR九州の豪華寝台列車「ななつ星」をデザインした水戸岡鋭治氏の協力で、既存の車両を改装。2020年までに「昭和」「八頭」「若桜」の3両の観光列車が登場した。木材をふんだんに使い、座席ごとに異なる生地を用いるなど、乗っていてワクワクするような内装と外観になっている。

ローカル線は利用者減に伴い便数が減るのが「常」だが、若桜鉄道は20年に行き違い設備を中間駅に整備。むしろ列車本数を増やし、「攻め」の姿勢で利便性向上の挑戦を続けてきた。

だが、そんな若桜鉄道もコロナ禍の波にのまれた。観光客を中心とした普通旅客がコロナで伸び悩み、20年度は6期ぶりの赤字になった。

一方で、地元住民を対象にした新たな取り組みも進んでいる。八頭町観光協会は今年1月上旬、沿線の地酒やジビエ（野生鳥獣肉）を楽しむ「とことん地酒列車」を若桜鉄道に走らせた。参加者は車窓の風景を楽しみながら、ほろ酔い気分で「飲み鉄」の旅を満喫。参加者の大半は県民で、ワクチン接種かPCR検査の陰性証明を提示、さらにその場でも抗原検査して列車に乗り込むなどコロナ対策を徹底した。

若桜鉄道や沿線自治体の挑戦は、単に鉄道を生き残らせることではない。先人が築いた資源を有効に活用し、沿線に人を呼び寄せ、地域の魅力を高めることが目的だ。鉄道を生かした地方創生と言い換えてもいいだろう。大げさかもしれないが、鉄道と地酒という二つの価値を地元の人が再認識したことに、イベントの価値がある。

終点の若桜駅周辺では、地元出身の若者がおしゃれな日本茶スタンドを開くなど新しい動きが出てきた。苦戦を強いられる地方の鉄道だが、夢と希望を運ぶ公共交通機関として見直される日が、必ず来ると信じている。

新日本海新聞社 鳥取本社政経担当デスク 北尾雄一



若桜鉄道を走る観光列車『八頭』号



ほろ酔い気分で「飲み鉄」の旅を満喫する参加者